

終戦直後の窮乏生活体験

●阿佐谷南一丁目

木暮 正八

(大正五年生まれ)

わたしは昭和二〇年九月に復員し、故郷の高崎で休養した後、逡信省に復職しました。新しい職場は丸の内の東京中央電信局でした。

都内は徹底的な爆撃で見渡す限りの廃墟、よくもこれほど徹底して焼き払ったものだと驚くばかりでした。しかし、ところどころにビルが残っており、東京中央電信局もなんとか残っていました。

私の職場は対外無線通信担当で、復員帰りが多く、軍服に長靴の者がかなりおりました。勤務三番交替。ところが燃料不足で冬でも暖房がないのでした。夜になると、通信室内で通信用テープや板切れなどを大火鉢で燃やし、裸火で暖をとったのです。ほこりを極端に嫌う通信室内でこんなことが行われるなんて、今では想像もできないことです。しかも食糧不足で、お米のご飯などめったに口にできません。弁当はせいぜいさつまいも二、三本でした。

都内は焼け野原で人々は住むにも家がなく、皆遠方の身寄りから通勤していました。わたしは高崎からの汽車通勤で、

片道三時間もかかりました。やむなく西荻の独身寮に入れたもったいのです。

炊事道具は全部自前で工夫しなければならぬのです。結局手軽なニクロム線コンロを使い、軍隊の飯ごうで米を炊きました。ところがあちこちでこのコンロを使いますと、電線のヒューズがとんで、寮全体が真っ暗になってしまい、とうとうニクロム線コンロは使用禁止になってしまいました。木炭コンロに頼るしかありません。当時はガスもなければ、灯油もありません。週三日でも寮生活ができれば、あとはなんとか高崎から通勤できるのでした。

通勤列車がまた大変でした。闇屋と買い出し客と通勤者ですごい混雑、まともに列車に乗ろうとしたら、いつ乗れるかわかりません。いきおいわれ先にと汽車の窓から飛び乗るのでした。

こんな状態でやっと列車に乗り込み、すしづめの車内に三時間も立ち通しですから、疲れてしまふのでした。このようにひどい環境の中で、職員は生きるために必死に頑張りまし

た。

昭和二一年になりますと、極端なインフレから預金封鎖が行われ、新田の切り替え、農地改革、憲法改正、戦犯の極東軍事裁判、公職追放等の旋風が吹き荒れました。

このようなときに、私は先輩のご配慮により東村山の高等通信講習所に転勤することになりました。ここには構内に住む所もあるというのが、何よりの魅力でした。

高等通信講習所というのは、中央線国分寺駅から多摩湖線というマツチ箱のような電車で行く草深い所がありました。陸軍少年通信兵学校の跡で、広大な敷地に兵舎や講堂だった建物が何棟もあり、これをそっくり使用していたのです。ここでも職員は自分たちの住と食の確保に必死でした。住のないは構内の空室に住み込み、草原を耕して盛んに野菜を作っておりました。私は着任早々、まず住む所を確保することから始めました。

わたしは軍隊当時医務室だった建物の一室に住み込みました。部屋は広いのですが、全く何もない板の間。ここに六尺腰掛をいくつか並べ、その上に渡り廊下を乗せ、これに畳を敷いて腰高な座敷にしたのです。

このような材料は構内の建物を物色して集めてくるのでした。畳は柔道場へ行けばまだあるというのです。早いものがちでした。炊事道具はなんとか間に合いました。燃料は木炭、薪、ニコロム線の電気コンロでした。

入浴は、自分で工夫するしかないので。私は防火用水の

コンクリート水槽を見付けてきて、綺麗に洗浄し、これに水を張ってニコロム線コンロを投入し、電流を通じて沸かししました。通電中は、危険で絶対に水に触れることはできません。こんな思いをしても無いよりはましでした。

これで住の問題は何とかなり、あとは食べるための野菜作りでした。構内には草原がいくらでもありましたから、草原をシャベルで掘り起こし、さつまいもをはじめ、ナス、キュウリ、トマト、小松菜、白菜などを栽培しました。労をいわず空き地を開墾すれば自分の耕作地として使用できるのでした。

このような苦勞をして、妻と子供を高崎から呼び寄せ、親子三人一緒に生活することができるようになった喜びはなによりも大きかったです。

学生寮日誌

●高井戸東二丁目

清水 義彦

(大正一五年生まれ)

昭和二〇年四月一四日 土曜日 快晴

甲週 天野晴夫

乙週 青空雲雄

一、特記事項

Y君消防署出勤(註) 学徒勤労働員)

一三日二三時より一四日二時半まで三時間半にわたって
主として帝都の中心部が爆撃された。

高円寺駅附近にも爆弾、焼夷弾が落下し相当の被害を生
じた。

我が寮は敵機退出後、寮生一同直ちに現場に馳参じ、消
火作業に従事した。

二、注意事項

なし

三、所感

敵機の高円寺駅附近の投弾において、初めて眼前に焼夷
弾によって家屋に引火する様子を見たのであるが、それを見
るとそれが落ちて家屋に火がつくまで一分足らずであつ

た。

その時間の短かいのには驚いた次第である。考えるに非
常に時間が短かいため、初期防火活動には更に敏活迅速を
要求するが、防火用水桶の配置も更に一考を要すると思つ。

五月二八日 月晴日 晴

甲週 天地一夫

乙週 海野広志

一、特記事項

(一)、本日午後七時の報道にて神雷特攻隊員の戦果の発表
あり。

(二)、午後一時ごろB 29に誘導された凡そ五〇機のP 51が
来襲(犬吠崎方面より)。

午後二時八分三〇秒空襲警報解除。同時刻頃B 29二機来
襲、主として千葉県の松戸附近の軍事施設を襲う。

二、注意事項

なし

三、所感

防空壕の鍵の置場所が不徹底である。必ず元の場所にもどしておかないといざという場合困る。また置場所を廊下等では罹災者（註）寮附近で被災し、臨時に寮の講堂に収容された者）等の出入の關係上よくないと思う。また防空壕をあけた後は必ず鍵をかけることを忘れぬようにして頂きたい。

敵の本土来襲再び頻繁となる。重要な荷物はなるべく防空壕へ入れとくか、また一室（空室）に入れて置いて誰か寮にいる者がいざという場合入れることにしてはどうか。

今回の罹災者は段々と今までの経験等により壕を掘り、その中に荷物を入れ、大変助かったようであるが、荷物は助かって田舎へ送るのにそれを梱包するむしろ、や縄が無くて困っているようである。庭の菜園のまわり等に用いる縄はその方にまわして用い、また各自が今の内にさがしておかないと後に困るようなことに出くわすと思う。

度々の空襲により寮の上空を飛来することが多くなつて来た。その際いそいで退避する事はいまでもないことである。その退避はつとめて素速く迅速にせねばならない。このような時はどうしても畠の中を通らねばならないので、せっかくのナスやキュウリをつぶす恐れが多分にある。それで壕の前には人の通れる丈の道をつくる必要があると思う。

五月も残り僅かとなり、段々気候も暑くなり始めたと同

時に、用水桶にボーフラが出て来た。蚊や蚤は病原菌の媒介物である。何かこのボーフラの発生を防ぐ方法はないだろうか。

月 日 日曜日 晴

甲週 春山三郎
乙週 秋川七夫

一、特記事項

なし

二、注意事項

なし

三、所感

一 体学徒の勤労作業の真面目さは奈辺にあるのであるか。

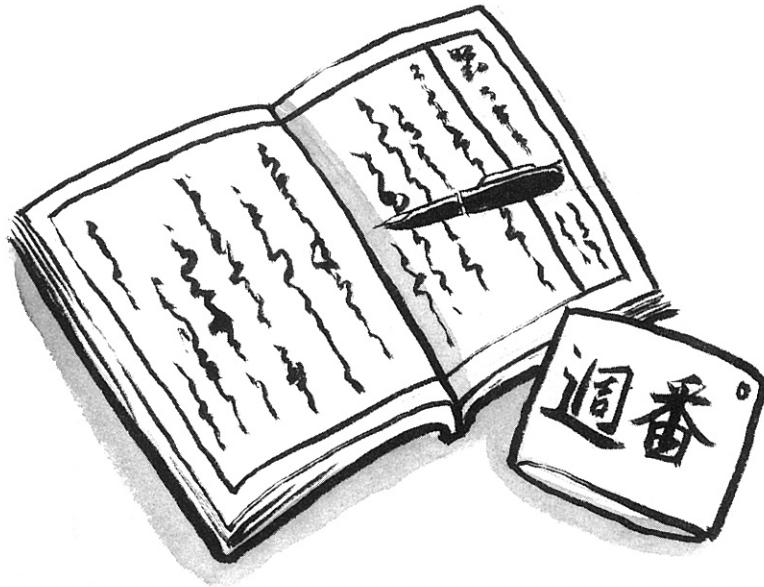
現世局に処して兵器、食糧等戦時必要物資の増産に敢闘することそのことが国家に報ずる重大な役割であるとともに、それによる公共的全体精神の涵養、体力向上、勤労精神の育成等いずれも極めて結構であることは今更之を喋々するを要しない。しかし問題はこの勤労作業が学生生徒の勤労作業であるということと、その実行いかんにあるのである。

学生生徒とは常に学ぶ者の謂であり、あくまでも学問に携っている者であつて現行のごとき通常動員の制は戦時の特殊の変態である事はいまでもない。しかして真の学問

こそ最も具体的にしてしかも最も力強く現実を支配する力を養成するものであるから、従って学徒はいかなる地位や境遇に立とうともただ管学に従事すべきであって、他のことは総て副次的性質のものでなければならぬ。そして学徒は実に学問を媒介としてこそ国家に貢献をしなければならぬのである。経済人が経済を、労働者が労働を媒介として然^しかするがごとく。

これは戦時中の大学、専門学校の学生寮で、一週間の間、週番と称して二人一組で、寮生活の雑用をする当番の日誌である。執筆者の氏名をかえた以外はほぼそのままにした。

その寮も老朽化と現代の学生気質に勝てずクーラー、電話などのある個室で、快適な学生生活が送れるように建て替えられた。そんな寮で学生は今は何を考えているだろうか。



戦争の傷跡

●成田西一丁目

高山 とみ子

(大正二年生まれ)

私たちは開拓団としてソ連の隣の所へ行きました。寝ずに大豆を畑にまいたり、豆を布袋に入れ、兵隊さんに送るのだと言って、馬車に積みに駅へ行きました。戦争が終わると同時にソ連兵がやって来ました。女性はみな頭をぼうずにし、顔には墨を塗り、男の服を着て逃げました。

後から機関銃の弾が飛んで来ます。赤子は置いてゆかれ、泣きさげび、見かねてだき上げては、少し歩くのだが、つかれてしまい、連れて行く事が出来ないません。あの子は、今どうしているのでしょうか。逃げる道は、湿地でずぶずぶと足がひざまで入ってしまい、大変苦労しました。私は三つの子を背中に右手に六つの子、左は九つの子を連れて逃げました。子供がぬかるみに入った足を引っぱって助けてくれました。ほんとうに日本に帰れると聞いた時には大声で喜び、さげびました。

主人は戦死、六つだった子は病死してしまいました。今は二人の子を始め、皆に優しくされながら毎日楽しく過しております。今でも思い出すとぞーと致します。あまりの恐しさ

に人の名前も皆忘れてしまいました。

私の戦争体験

●東村山市秋津町三丁目
樽美 忠夫
(昭和六年生まれ)

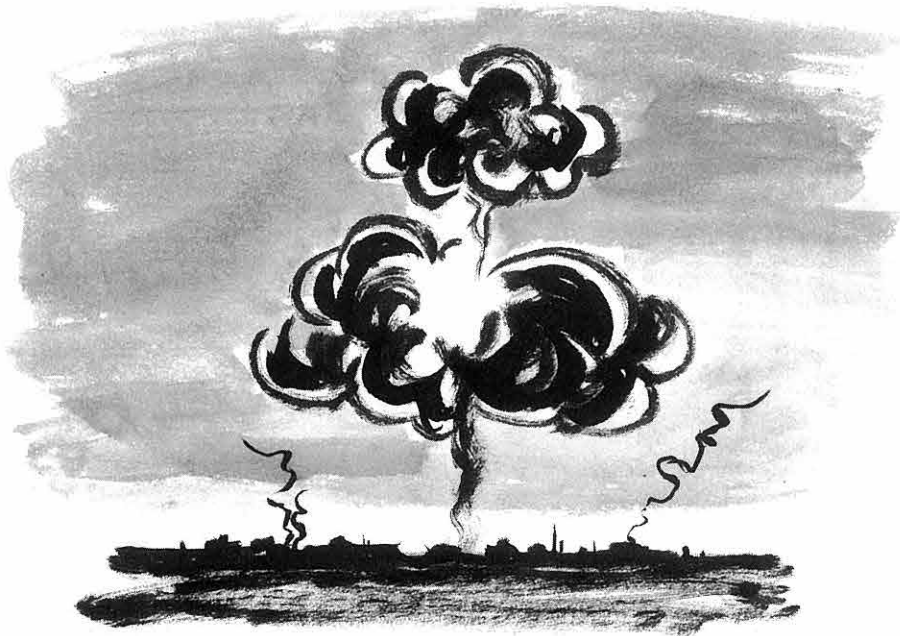
物がなくなる、命がなくなる、自然がなくなる、人の自由がなくなる戦争。防空頭巾をいつも身につけての通学登校。軍事訓練に明け暮れる毎日。警戒警報サイレン、その時すでに上空には敵機襲来。飛行機の爆音、ロッキードの急降下ダダダダダダ機銃掃射B29の風切る音、すさまじい地上での爆発音。爆風にシャツのボタンが切りさかれたすさまじさ。壊れた建物。炎。戦争、それは人と人との殺し合い。自然環境を汚染破壊し、家を森林を焼き払い町を壊し罪なき幼な子女、老人までまきぞえにし、夜な夜な空襲警報におびえ、おちおち眠れない明け暮れ、人間の心までも変える悲しみ、憎しみだけが残るむなしい戦争。戦況が悪くなり激しさを増すにつれ子供たちの楽しみな絵本、おもちゃ、駄菓子類が店から消え、タバコ、酒はもちろん日常生活用品、必需品、衣類、食糧品、砂糖、塩、味噌、醤油、米、麦、いも、野菜、魚、肉などなど、ありとあらゆる物資・食糧品が町から消えて行き、鉄、金属類の供出、鍋、釜、鉄瓶、代わりに土鍋、土釜、土瓶となり、鉄製生活用品やお寺や神社の銅像、吊り鐘まで

供出し、弾丸、軍艦、飛行機、小銃、大砲ありとあらゆる軍需品に変わり、若人は戦場へ駆り出され、国内を支えるのは女、老人、子供、学生。軍需工場への動員、下級生は男手で協力し助け合い、「勝つまでは贅沢はやめましょう」を合言葉に、軍国一色のもとに尋常高等小学校の私たちは防空壕、塹壕、高射砲、陣地づくりへの動員。食糧難にあえぎながら空腹の毎日。配給のジャガイモの主食、少々の米の配給を受け、調味には海水を汲み煮つめてわら灰を入れて、にがみ、あくを抜き取り、一合の米をぐつぐつと煮込み、おもゆがいつくり、一〇人位で食べた日々。貝殻の杓子ですくえば、ばらばらと釜の中で泳いで逃げる米粒。悲しい思い出。油を搾り取ったペチャンコせんべみたいにかス大豆を焼いたり、米と一緒に煮たり、さつまいもの苗取り後の床イモ、煮れども煮れどもガジガジのさつまいもも野菜の代わりに茎まで食べて、戦中戦後の食糧難を乗り越えた事を忘れない。

澄み渡るおだやかな青空、雲仙岳の彼方に真白い雲、ほん

のりとうすピンク色のあざやかな輝き、蓮の花のようなあの雲、何万人もの人の生命を血を吸い取った新型爆弾のあの原子雲。今も目に浮かぶはるかな戦争。苦しく悲しい暑い夏の思い出。親を亡くした子供たち、兄弟を、姉妹を亡くした人々、子供を亡くした親、家を焼かれ壊された人々。むなしさ、悲しみ、憎しみだけが残る戦争。一つの地球に住む人間同志の殺し合い、憎しみ合い夢も望みも人間らしさが壊される戦争。二度と起こさないよう、みんなで見守りし、一人一人がよく考え、みんなの地球に豊かな環境と平和な暮らしを守りたいものである。

地球に住む人間同志の、人間らしいあたたかい心と友情をスローガンに、力を合せて心を合せて協力し、助け合うおもいやり、戦争のない豊かな地球の自由平和をみんなの手で築き、自然を守りたいものである。



私の人生の最も悲しき 辛い日々より

●南荻窪一丁目

都筑 初枝

(昭和七年生まれ)

私は、昭和七年渋谷区は本町という下町に長女として生まれ育ち、小学校は当時、本町国民小学校そして帝京女子商業学校と進み、歩む…。

当時の様子を克明に書いてみる。私はいつものように学校から帰ると父は、たばこを買いに行くと言って家を出た。なぜかその日は父がいたのであろう。しかし昭和一六年ごろより品が次第になくなり始め、父もすぐには戻ってこない。何もかも並んで買うのである。品物不足が警戒警報に変わり、ライトで町全体を照らしスピーカーで重々しく流された。この警戒発令とともに町は静まり返り、一人として外に出る者はいなくなり、皆同じにして防空頭巾を被ったものでした。物不足の折、母は自分の着物をこわし子供たちに頭巾を作っていました。食べ物がだんだんなくなり始めていたが、まだ学校へ通えていました。間もなくスカート禁止令となり、皆同じモンペ姿の異様な雰囲気の中、世の中は戦争という渦にまきこまれていきました。頭に頭巾、下はモンペ姿の身にもなれてきたころ、配給のお米等を家族構成記載の帳面を持ち、よく並んだものでした。当時配給の物は米や魚、特にサンマ

やアジはバケツ一杯もらいました。魚は新鮮で豊富でした。このころよく町で流行ったフレーズは「ほしがりません勝つまでは」でした。しかし私の心の中でも、日本国民の考えた気持ちも、不満は膨らんだ事と思います。それにしても、こんな時代がいつまで続くのだろうと、とても恐かったです。

昭和一六―一七年になると空襲警報が変わっていた。敵の飛行機が撃ち落とされたと騒ぎ、皆、野次馬のごとくアメリカ兵の墜落した様子を見たこともありました。戦争も酷くなり、学校に行く途中でも警戒警報発令となったり、ぼちぼち疎開という言葉も重みを増していた。町の人々の姿も減り、昭和一七年私も疎開した。私は小学校五年生でした。すぐ下の弟と父に連れられ、埼玉の春日部に向かった。当時疎開は集団疎開と縁故疎開があった。春日部は伯母の家なので、いわゆる縁故疎開でした。春日部は二川村という所で、東京・埼玉・茨城の県境で、バスにゆられ三〇分、ほうし花という停留所で降り、汚ないグラグラゆれる橋を渡る、それもお金を取るのです。また更に歩く長い道程でした。バスは一日二本なので、逃がしたら大変です。二川村は江戸川と利根川を挟む川

で、土手はなんの囲いもなく、歩くのがとても怖かったです。

疎開生活が始まりました。自分の家でもないので肩身の狭い思いをしました。伯母はお米こそ食べさせてはくれませんでした。干し芋はお腹いっぱい食べました。そのころの庭先には干芋が莫^ご座^ざいっぱい干してありました。今でも目をとじるとそのころの風景が思い出されます。

しかし、そんな疎開生活も短く終わり、一年位で東京に戻りました。が、六年になった五月に空襲警報が頻繁になり、新宿の空はアメリカの飛行機が飛びかい、悲劇の幕が切つておとされたのです。五月二三日であつたと思います。東京が空襲にあつた。焼夷弾は昼となく夜となく落とされ、夜空は飛行機でいっぱいでした。ある夜、家がひっくり返るような揺れで、「避難しろ」「避難しろ」と警報され、道幅いっぱいぞろぞろ歩き、ぎっしりでした。死亡者も負傷者も数多く出た事でしょう。またも警報があり、「そっちに行つてはいけな」と何度も言われ、言われるがままに私達は避難しました。避難の途中、道を間違えた人や火をかぶつた人、歩いている道には死体のごろごろ、川に火だるまで飛び込む人、死体はまるで炭のようにまっ黒で、頭、手、足がやつとわかるくらいでした。家々も目の前でボーボー焼け崩れ、柱の焼け崩れる音の凄まじいこと、「ドスン」「ドスン」とそれは言葉では言い表せない程です。涙さえも空襲で焼けてしまいました。その夜は一時的に兵隊寄宿舎に泊まり、夜が明けました。何もなくなつた東京から再び疎開となり、家族で春日部に行きました。しかし私たち家族の居場所もなく、再び東京へ戻っ

て来ました。

東京に戻り、焼け野原に焦げた柱を一本一本集め、バラックを建て、腰をかがめて生活できる家になりました。また、防空壕を探し自分たちの生活用品をみつけ、持ち帰る事になりました。しかしその品々は全ていぶり、臭く焦げていました。その焦げたお米や毛布での生活となり食べ物もとぼしく、ただ日の暮れる日々でした。近くでは味噌工場が焼けて、「味噌があるぞー」と呼びかけられ、焦げた味噌をもらいました。その味噌汁のおいしかった事、今でもその味は覚えております。スイトンにしるお団子になつたものではありません。しかし、かぼちゃの種をまき、育てたところ、土が焼けて肥やしになつたせいか、とても大きなかぼちゃがなりました。そして広島原爆の事を聞きました。「電車に乗っていた人はそのままの姿で死んでしまつたんだつてよ」と恐ろしい事です。八月一日、いよいよ終戦です。警防団の人より「天皇陛下のお言葉があります」といわれ、皆ラジオを聞き、静まる中、終戦。日本は負けた事を告げられました。終戦後、農地解放がうやむやにやり、国では戸籍謄本も焼かれ苗字を変えた人も少なくありませんでした。

こうして戦争の道のりを歩み過ごしてきた私どもの時代は、その後急成長をとげ、現在では、唯物社会となり環境汚染も著しく、反省する面も多々ありますが、二二世紀を目前にして、日本国民一人ひとりが戦争の傷あとを忘れず、明るい住みやすい国になりますよう、限らない努力をしようではありませんか。